

『南総里見八犬伝』

解説

江戸後期の戯作者・曲亭馬琴（滝沢興邦）の読本『南総里見八犬伝』を劇化したもの。馬琴は文化十一年（一八一四）から二十八年の歳月をかけて全九輯九十八巻百六冊の大作を完成させた。その内容は、室町時代に京の將軍家と鎌倉公方が争った戦乱の世を背景に、安房の国主・里見家を救うため八人の勇士が活躍する物語。馬琴が理想とする儒教や武士道精神が因果応報、勸善懲悪を主とする展開の中で描かれているが、この八人の勇士が、里見家の息女・伏姫の愛犬八房との異類婚によってこの世に生を受けた「八犬士」である奇譚に娯楽性の追求がある。その普遍的な魅力は、現代においてもテレビ人形劇や映画などで折々に取り上げられていることでも理解できる。はじめての劇化は天保五年（一八三四）十月大坂若大夫芝居の「金花山雪曙」とされ、その後幕末から近代にかけて様々な新脚本が考案された。現行上演の基となっている台本は昭和二十二年九月東京帝国劇場及び二十八年一月新橋演舞場における渥美清太郎脚色のもの。ともに尾上菊五郎劇団による上演であった。それ以来「大塚村墓六内」「円塚山だんまり」「芳流閣決闘」「対牛楼仇討」という見せ方が定着した。国立劇場では昭和四十四年に始めて取り上げられ、今回で五演目。やはりすべて菊五郎劇団による上演である。前回、平成二十七年における意欲的な台本改修を経て、令和版の「八犬伝」が上演される。

あらすじ

・プロローグ

室町時代のこと。関東の地では扇谷定正が管領に君臨し、公方の足利家を退けて暴虐の限りを尽くしていた。安房の国主・里見義実が正義の兵を挙げたが、奮戦むなしく落城寸前。その窮地に義実が愛犬八房に向かって発した「敵将の首を取れば娘の伏姫と添わせてやる」という戯れ言が現実のものとなり、息女伏姫は八房と富山の山中で暮らすこととなった。欲深な定正はその伏姫さえも我がものにしようとするが、叶わないと知るや、家臣に命じて姫を狙撃させた。しかしその身替わりとなったのは八房。伏姫は八房に守られた命を仏に捧げて戦のない世の中を招来しようと、懐剣で自らの胸を貫いた。すると伏姫が身につけていた水晶の数珠が断ち切れ、八つの大珠が虚空に飛び散り、仁義八行（仁義礼智忠信孝悌）の文字を一字ずつ浮かび上がらせた。この霊珠を持つ者が後に里見家の忠臣八犬士となり、定正討伐に立ち上がる運命となる。

・序幕（武蔵）第一場 大塚村墓六内の場

あの富山の奇瑞、そして里見家の滅亡からかなりの歳月がたった。いまだに扇谷定正は里見家ゆかりの者を根絶やしにしよう執心している。

ここは武蔵国大塚村の荘官墓六の屋敷。この墓六と亀笹の夫婦は強欲で知られ、娘浜路の婿にも持参金目当てで代官の籾上宮六をとることを目論見、正月の今日がその祝言の日である。しかし当の浜路には互いに憎から

ず想う許嫁の犬塚信乃がいた。浜路と信乃はともに親を失ってこの家に引き取られた身。互いに心通わせ、墓六夫婦から邪険にされながらも愛を育んできたのであった。その縁談に心中穏やかでない信乃だが、今日出立をしなければならない大事があった。その大事とは……信乃の生家である犬塚家は里見家の旧臣。その里見家が扇谷定正との合戦に敗れて断絶したため、信乃は父の意志を継いで里見家再興を宿願としていたのであった。その足掛かりにまずは犬塚の家を興さなければならない。今はその手蔓として父が預かっていた里見家の宝刀〈村雨丸〉を、定正と対立する澁我公方・足利成氏に一刻も早く献上する必要があるためである。浜路は望まぬ他人と添わせられる不幸を泣いて訴えるが、今の信乃にはどうする事も出来なかった。

この家には、いま一人里見家再興に思いを馳せる男が居た。下男の額蔵こと犬川莊助である。ともに「犬」の字の入った姓を持つ二人は、それぞれ信乃は「孝」、莊助は「義」という字が浮き出る霊珠を持ち、さらに肌には稀なる牡丹の形をした痣があった。この不思議な符号から二人は義兄弟の縁を結び、定正討伐と里見家再興を誓い合った。

信乃は大望のため、心ならずも浜路を置いて此家を去らねばならない。この事を、日頃から浜路に横恋慕している網干左母二郎という浪人者が盗み聞きして、信乃を陥れようと村雨丸と自分の刀をまんまとすり替えた。実は左母次郎はかつて定正に仕えていた侍で、再び扇谷に仕官するための献上品として、この村雨丸は恰好の品であった。ここに今度は悪巧みをする墓六が現れ、その偽刀を自分の刀とすり替え、ぬか喜びして去って行った。そんな悪者どもの企みを露知らず、信乃が贋の刀を手に出立する。哀れにも一人残された浜路は、祝言嫌さにこの場で自害をしようとするが、これを左母二郎が慌てて留め、信乃の跡を一緒に追うと巧みに騙し、浜路を駕籠で連れ出した。

屋敷に、仲人役の軍木五倍二に連れられて婿の籾上宮六が到着した。しかし既に浜路は左母次郎に拐かされてこの家に居ない。墓六はその言い訳に「重宝村雨丸」と言って刀を差し出すが、これも当然真つ赤な偽物。宮六の怒りに墓六と亀笹は逃げ出していく。

・序幕（武蔵） 本郷円塚山の間

武蔵国本郷の円塚山は銀雪に覆われている。この場で先ほど、寂寞道人という修験者が自ら火の中に身を投げて仏となる「火定」を行い、多くの村人が拝みに現れたが、今は人の気配が全くなくなった。

浜路を連れ出した左母二郎は円塚山に着くと、女を駕籠から下ろした。呼べど叫べど人の来ない山中で、左母二郎に「女房になれ」と脅された浜路は、いま始めて騙されたと知って口惜しがる。しかも左母二郎の手には愛する信乃が所持しているはずの村雨丸があった。このままでは信乃が咎めを受けてしまう。偽刀の大事を知らせなくてはならないと、浜路は左母二郎の意に従う振りをして村雨丸を奪って斬りつけるが、容易く奪い返され、無残にも斬られてしまった。可愛さ余って憎さ百倍と、左母二郎が浜路を手にかけてしようとしたその時、忽然と一人の修験者が火定の跡から出現した。火遁の術を操る寂寞道人であった。道人は左母二郎を妖術で翻弄すると、斬り倒して村雨丸を取り上げた。そして瀕死の浜路を抱き起こし、自らこそ「兄の犬山道節」と本名を名乗った。今語られる二人の素性。道節と浜路は里見家ゆかりの武士犬山道策の子であったが、浜路は幼い時に墓六家に養子に遣わされ離れ離れになった。その後、主君と父は扇谷定正

に攻められて横死。道節は修験者となってその仇を討つ機会を狙っていたのである。浜路は今際の際に兄に会えた事を喜び、恋い慕う信乃に村雨丸を届けて欲しいと懇願して息を引き取る。道節は妹の命を救えなかった事を悔やみ、願いを聞き届けると声をかけて、その菩提を弔った。

妹から託された村雨丸を抜く道節。名刀の噂違いなく、抜けば珠散り空に稲妻が走った。この暗闇に次々と武者が現れ、敵とも味方とも判らず、争い探り合う。犬山道節、犬塚信乃、犬川莊助、犬田小文吾、犬坂毛野、犬村大角、犬江新兵衛。彼ら八人は仁義八行の字が浮き出る珠を持つ里見八犬士として、後に義兄弟の契りを結ぶことになるが、まだ互いの運命を知らない。

・二幕目（下総）第一場 澁我足利成氏館の場

関東管領・扇谷定正と対立し鎌倉を追われた公方の足利成氏は、下総の澁我に館を構え澁我公方と称していた。成氏は里見家に預けおいていた足利家の重宝村雨丸を所持することで、定正の優位に立てると、犬塚信乃による宝刀の献上を心待ちにしていた。この成氏の重臣には、密かに定正に内通し、村雨丸を横取りしようとする企む馬加大記もいた。

信乃が色袴を着した凛々しい登城してきた。御簾を上げて成氏が現れ、早速に村雨丸の献上を促した。しかし刀をすり替えられていた信乃はひたすら低頭して献上が叶わぬ事を詫び、あらためて村雨丸の探索を懇願する。この無礼に成氏が激高し、信乃が定正のまわし者だという大記の告げ口を真に受けて、信乃の捕縛を家来に命じた。今ここで囚われの身となつては大望成就が叶わない。信乃は追っ手を必死で振り払いながら、城の高殿にある芳流閣へ逃げていった。この武勇優れた信乃に縄を掛けられる男は家臣に無い。そこで白羽の矢が立ったのは、主君に諫言した罪で今は獄屋に繋がれている、捕物拳法の使い手犬飼現八であった。

・二幕目（下総）第二場 芳流閣の場

芳流閣の大屋根の上で大勢の捕手を次々に蹴散らす信乃。そこに犬飼現八が十手を持って挑んできた。屋根上で繰り広げられる若武者同士の勇ましい戦い。互いに譲らぬまま組んず解れつし、二人は組み合ったまま真逆さまに下を流れる利根川に落ちていった。

・三幕目（下総） 行徳古那屋裏手の場

信乃と源八の二人は気を失ったまま流され、別々の場所に流れ着き、それぞれ傷の養生を行っていた。信乃が世話になっているのは行徳の商人宿古那屋の倅である犬田小文吾。この小文吾を一人の男が訪ねてきた。その顔を見て信乃が驚く。芳流閣で死闘を繰り広げた犬飼源八であった。実は源八と小文吾は乳兄弟の間柄。信乃を捕らえようとする源八を小文吾が宥め、その小文吾の仲介により二人は互いに遺恨のないことを諒解し合い、源八は信乃の大望に助力することを誓う。そして今気づいてみれば、源八の頬には牡丹の形をした痣があつた。互いに「犬」の字を姓に持つ三人が打ち明け合えば、体のどこかに牡丹の痣があり、源八は「信」、小文吾は「悌」、信乃は「孝」の字の浮き上がる珠を所持している。ここにかつて源八に父の仇を討つ助太刀を受けた犬村大角が現れ、やはり「礼」の字の珠を所持することが判る。この不思議な出会いと縁は神の導きと、四人は義兄弟の契りを結ぶのであった。

ここに捕手が信乃と源八を捕縛に現れた。小文吾は相撲で鍛えた体で捕

手を制して信乃と源八を大角に託して逃がすが、自らは捕手に絡め取られてしまった。

・四幕目（武蔵） 馬加大記館対牛楼の場

足利成氏に仕えていた馬加大記は扇谷定正方に寝返って主君を追放し、今は武蔵国待乳城の城主となっている。その城内の楼閣対牛楼は眺望の美しさで知られ、大記の栄耀栄華を象徴している。今日は後ろ盾に仰ぐ定正を招いて、これより豪勢な酒宴が始まる。その定正をもてなす趣向として大記が用意したのは、磔にした小文吾であった。これから憎き里見家の残党を血祭りにあげて、弄ぶつもりである。

色づく紅葉と小文吾の磔姿を肴に酒を楽しむ定正と大記。そこへ今評判の旦開野という女田楽師が率いる一座が招き入れられた。その美しさと艶やかな技芸に一同感嘆の声を漏らす。大記はその旦開野にわざわざ小文吾を切り苛ませ、嗜虐的に楽しむ。しかし旦開野は隙を見て小文吾の縄目を切ると、返す刀で大記を突き刺した。実は女と見えた旦開野は、大記に滅ぼされた栗飯原首の一子・犬坂毛野であった。父の仇を雪がんと大記を狙い、今日この屋敷に女田楽師に姿をやつして入り込み、敵討の機を得たのであった。大記を追い詰める毛野。その加勢に小文吾をはじめ、犬山道節とそれに従う犬江新兵衛が現れた。見事に大記を討ち果たした毛野は「智」の珠を所持し、そして新兵衛も「仁」の珠を持つ八犬士の一人であった。皆は八犬士うち揃うての定正討伐を誓い合い、敵の居る白井城をめざして進んでいった。

・大詰（上野） 扇谷定正居城奥庭の場

馬加大記滅び、残る巨悪は扇谷定正のみ。定正は里見家の軍勢に攻め込まれ、無念の表情を見せて必死の抵抗をするが、現八と信乃に追い詰められ、ついに村雨丸で討ち取られた。伏姫の死から幾星霜。ここに集うことが叶った八犬士が、天下の謀反人を誅伐した。今ここに念願の里見家再興が叶う。里見家の武名を末代まで轟かさんと、八犬士は「仁義礼智忠信孝悌」の八文字が書かれた旗を翻し、勝ち鬨をあげるのであった。

（鈴木英一）